関西の名工
Master Craftsman of kansai

三味線職人
石村隆一さん

1949年、堺市生まれ。1862年創業の「つるや楽器」5代目。22歳から家業に入り、4代目の父・廣一氏に師事。「どこまで張れるのか限界をつかむのが経験といえば経験。でも毎回、もっと張れたかなと思いますね」。「うちでは皮張り（張り替え）のほか、糸巻きの調整、さわりをつけるなど三味線を完成形にしてお客さまにお渡しするのが仕事です」

琵琶法師が堺で誕生させた、三味線

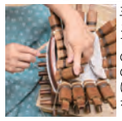
堺音頭はこんな出だしで始まる。「♪物のはじまりゃなんでも堺 三味も小唄もみな堺 ホンニ ソヤソヤ ヨイ堺～」。三味とは三味線。歌詞のとおり、三味線の発祥は堺なのだ。「そうなんですよ。南蛮貿易で栄えた16世紀後半、堺の港に琉球から入ってきた蛇味線（三線）に改良を加えたのが三味線の始まりです」と教えてくれたのは、堺で江戸時代末期から続く和楽器店「つるや楽器」の5代目で三味線職人の石村隆一さん。

琉球から堺に伝わった三線を手にしたのは、同じ弦楽器の演奏者である琵琶法師だった。「三線は蛇味線ともいうだけにニシキヘビの皮が張られていますが、堺にヘビ皮はない。それで、琵琶法師はヘビ皮に代わって猫や犬の皮を張ったんでしょう」と石村さん。さらに、琵琶のバチに似た形のバチを三味線用に考案するなど、日本独自の「三味線」をつくっていった。

琵琶といえば、ヴィャ～ンと余韻を残した響きが印象的だ。琵琶法師は、「響きのない弦楽器なんてつまらん」ときっと思ったのだろう。三線にはない、琵琶のような響きも三味線に取り入れた。「三味線には「さわり」といって、棹（さお）のいちばん上の部分に一の糸（3本の弦のうち一番太い弦）がかすかに〝さわる〟しくみがあります。これによって、三味線にはヴィ～ンという余韻のある響き、音の味と広がりが生まれました」。三味線は二の糸（弦）や三の糸（弦）を弾くだけでも、一の糸と共鳴し合い、響き合う和音のような音色を発する。私たちが三味線の音を聴いたとき、賑やかな音だな、厚みのある音だなと感じるのは、琵琶法師の思惑が成功したというわけだ。

ところで三味線をつくった琵琶法師が誰なのかについては諸説あり、中小路（かかしょうじ）法師、あるいは石村近江（かうみ）とも言われる。「正しくはわかりませんが、私たちのように古い三味線屋は苗字を持つことが許されたとき、石村近江にあやかって石村姓を名乗った者が多いです」

写真上／皮は、猫皮もしくは犬皮を使用。ただし近年は、音質は下がるが破れるリスクの少ない合成皮革も登場しているそうだ。写真下／猫皮や犬皮は、東南アジアから輸入。



三味線の皮は張り替えをするのが前提なのでもち米の粉を練ったのりを使う。張り替えの際、水で濡らすと胴にダメージを与えずきれいに取れる。

三味線には細棹、中棹、太棹があり、長唄などでは細棹、民謡などには中棹を使う。義太夫や津軽三味線は太棹だ。皮は、「音にこだわる方、歌舞伎の地方（じかた）をはじめプロの方は、高価ですが猫の皮を使われます。ただし、力強い音が特徴の津軽三味線は猫皮ではもたないので、犬の皮を使います」と石村さん。

津軽じょんがら節を演奏してくれた、6代目の石村真一朗さん。「1年やれば、人前で披露できるくらいに上達しますよ。若い人にもぜひ弾いてほしいですね」

写真上右／張り台の間にくさびを打ち込み、皮全体を強く引っ張っている。写真上左／皮張りで最も気をつかう「もじり」の作業。もじりで紐をねじりながら皮の張り具合を見て、「もう少し」、もう少し」と皮をぎりぎりまで引っ張っていく。引っ張るべき皮の箇所を見つけ、その箇所のもじりをねじって張りを微調整する。写真右／コンコンと指で皮をはじいて張り具合の限界を判断する。「板をはじく感覚になったら限界」とは先代の教え。

つるや楽器
堺市堺区大町東3丁1-6
TEL 072-232-0521
https://tsuruya-music.com

三味線づくりは、胴（皮を張る太鼓の部分）は胴師、棹は棹師と分業制。石村さんは、胴に猫や犬の皮を張る、皮張り職人だ。さっそく皮張りの作業を見せてもらった。最初に、湿らせた皮のふちまわりを軽石でこすって余分な薄皮を取る。胴に皮を貼り付ける「のり」は、もち米の粉を練ったもの。しっかり付くうえ、木にも皮にもやさしい。皮のふちに木栓をはさみ、皮をのりでいったん胴に貼り付けたら、「うちで、もう100年近く使っているでしょうか」という「張り台」を取り出し、皮をはさんだ木栓と張り台を紐でしっかり固定した。

いい仕事をするには、びびったらあかん

「皮張りでめざすのは、皮を限界ぎりぎりまで張ることに尽きます」と石村さん。破れる寸前まで皮を引っ張って貼ることで、三味線はいい音を鳴らすのだという。そのために、まずは張り台の間に木のくさびを金づちで打ち込み、紐を突っ張らせる力で、皮全体を強く引っ張っていく。次いで、「もじり」という小さな竹の棒を紐に絡ませてねじり、さらに紐を突っ張らせ、皮をより一層、引っ張っていく。

石村さんは、もじりをねじりながら、時折コンコンと皮を指ではじく。低い「張り音」ならまだ限界ではない。皮を指で押さえてやや沈む箇所があれば、そこにはもう少し引っ張れる余裕がある。そのたびにもじりをねじる。「もうちょっと張ろう、もうちょっと張ろうと思うんです。いい音をつくりたいから」

ちょっとの限界を超えて皮が破れてしまうことはないんですか？と問うと「ありますよ」。「でも、破れることが頭によぎって中途半端でやめてしまうと、あとでえええ仕事やなかったな、びびったらあかんなと思うんです」。特に、厚みのある犬皮に比べて、デリケートな猫皮は破れやすく、神経をつかうという。

さて、再びコンコンと皮を指ではじく石村さん。「張り音」は先ほどより高い。「皮を押さえながら指ではじいた音と、押さえずにはじいた音が同じになったら、ほぼ限界まで張れています」。「なんぼでも触りたくなるんですけど」と笑いながら、そのまま一晩置き、のりが完全に乾いた翌日、仕上げをして完成だ。

三味線を使っていて「皮が破れた」というと、三味線を知らない人ならよくないことのようにも思うだろう。「それは逆で、10年も破れないような、ゆるゆるの張り方では三味線屋として恥ずかしいです。当然、音は良くない。3～4年で破れるくらいの張り方じゃないといい仕事をしたことになりません」

つるや楽器は今や堺で唯一の和楽器店。「戦前までこのあたりには演芸場や花街がありましたし、私が小さいころにも多くの料理屋さんが軒を連ね、芸妓さんたちが三味線を弾くお座敷遊びなども盛んでした。でも、今はそんな料理屋さんもなくなり、三味線を楽しむ人も少なくなりました」

そこで奮闘しているのが、石村さんの長男で6代目の真一朗さん。「敷居を下げて多くの人に三味線に触れてもらう機会を増やしたいと活動しています」。三味線の演奏家でもある真一朗さんは、「ワンコイン体験会」を随時、開催。1時間ほどで「さくらさくら」が弾けるようになって楽しいと好評だ。中学高校の三味線部での指導も担当し、民謡にこだわらず、歌謡曲やアニソンも学生たちと演奏。また地域のイベントなどにも積極的に出演して、幅広い層に三味線の魅力をアピールしている。6代目の姿に石村さんも「堺は三味線発祥の地です。三味線の文化を絶やすわけにはいかないですから。私もがんばりますよ」

限界ぎりぎりまで皮を引っ張る。めざすのは、最高の音色の三味線。

胴に貼った皮のまわりにはさんだ木栓と張り台に、紐をぎゅっとかけてしっかり固定。この後、皮を徐々に引っ張っていく。「私のやり方は親父がやっていたやり方をそのままです」と石村さん。張り台にくさびを打ち込んで皮全体を引っ張り、さらに「もじり」で微調整しながら皮を限界まで引っ張っていく。なお、皮の長持ちを優先させたいというリクエストがあれば、音質と破れにくさのバランスを見ながら、皮の張り具合は相談可能。